続・ハイデルバーグ・プロジェクトとデトロイト
タイリー・ガイトン氏とのインタヴュー

Lancour 弘子

デトロイトのイーストサイドに、ハイデルバーグ・プロジェクト（Heidelberg Project）とよばれる野外芸術環境があります。それについて４月号に寄稿させていただきましたが、今回はその続編です。ハイデルバーグ・プロジェクトの創始者であるアーティスト、タイリー・ガイトン（Tyree Guyton）氏にお会いして、彼のハイデルバーグ・プロジェクトへの熱い思いや今後の展望、そして、日本との接点などについてお聞きしました。

タイリー氏：シンボルマークといえるポルカドット(水玉模様)の時計をつけて

タイリー・ガイトン氏　プロフィール

1955年、８男２女の上から３番目としてデトロイトに生まれる。陸軍を除隊後、クライスラーのJefferson Assembly Plant や フォードの Rouge Plantで働く。1984年まで、デトロイトの消防士。1980年からCenter for Creative Studies（現在のCollege for Creative Studies)や Marygrove Collegeなどで美術を学びはじめ、デトロイト在住の著名な画家、Charles McGeeにも師事。1986年、ハイデルバーグ・プロジェクトをはじめる。NBC Nightly News, ABC Nightline, the Opra Winfrey Showにもゲスト出演。彼の作品は、デトロイト美術館をはじめ、Charles Wright Museum of African American History、University of Michigan Museum of Art, Studio Museum of Harlemなどで収蔵されている。

４月号を読まれなかった方もいらっしゃるかと思いますので、簡単な説明をもう一度。場所は、週末の野菜や花市で賑わうイースタン・マーケットから約１マイル半ほど北東にあるHeidelberg Streetの一画。通りの両側の空き地が野外設置場として利用され、廃品を素材とした作品がいたる所に展示されています。家自体が作品になっていたり、木から靴がぶら下がっていたりして、型破りで意表をつくものがいっぱい。ここを訪れる見学者の数は年間275,000人を超え、市内にある観光目的地の中では、デトロイト美術館とアフリカン・アメリカン歴史博物館の次に人気のある所。世界中のさまざまな国（約９５ヶ国）からやって来る訪問者の中で、最多数はドイツ、次がイタリア、そして日本。アートに関心のある人々には知名度が高くても、地元の一般の人々にはなぜかあまり知られていない、ちょっと変わった穴場的存在です。見学は自由で無料。詳しい情報はHPのホームページで（www.heidelberg.org）。

私がハイデルバーグ・プロジェクトと関わるようになったのは、今年の１月から４月までWayne State Universityで受講した“地域社会の中の芸術（Art in Community：Art as a Social Practice）”というクラスがきっかけでした。このクラスの課題のひとつは、チルドレンズ・ホスピタル、カプーチン・スープキッチン、ハイデルバーグ・プロジェクトの３ヶ所の中から、自分で一ヵ所選んでボランティア活動をすること。私はウィークデイは会社の仕事があるので、夜とか週末に手伝える所として、ハイデルバーグ・プロジェクトを選びました。日本人の観光客が多いのなら、英語のパンフレットを日本語に訳してはどうかと提案したところ、それが私のボランティアの仕事となりました。何度かハイデルバーグ通りに足を運んだり、自分なりに調べたりしていく過程で、これはもっと多くの人々に知ってもらう価値のある所だと強く思うようになり、本紙に寄稿することになった次第です。

ハイデルバーグ・プロジェクトには、人の心に何かを問いかける不思議な力があります。ちょっと違った角度から、映画を例にとって、私見を述べたいと思います。先日、図書館で“The Heidelberg Project: A Street of Dreams” という子供向けの本を見つけました。「ストリート・オブ・ドリームス」という副題はハイデルバーグ・プロジェクトのことをとてもうまく表現しています。読者の皆さんは、1989年に封切られたベースボールの映画「フィールド・オブ・ドリームス」をご存知でしょうか。この映画とガイトン氏の「ストリート・オブ・ドリームス」には何か共通点があるような気がします。どちらも意外な場所が舞台。ケヴィン・コスナー主演の「フィールド・オブ・ドリームス」はアイオワの片田舎。一方、ガイトン氏の「ストリート・オブ・ドリームス」は、デトロイトのうらぶれたハイデルバーグ通り。そして、周囲の人々が驚くなか、どちらも意外な行動に出ます。コスナー演じる主人公は、”If you build it, he will come.” という謎の声を耳にし、何かに取り憑かれたように、とうもろこし畑を野球場に造り変えてしまう。一方、ガイトン氏は、“You can change the world through art.” という内なる声に導かれ、アートの力で貧困と犯罪に悩むハイデルバーグ通りの変革を始める。環境や目的は違っても、夢を追いかけずにはいられない人間のロマンに共感します。

次の例は、「芸術は爆発だ」と言って憚ることのなかった日本のユニークな画家、岡本太郎。彼は「今日の芸術」という本のなかで、「今日の芸術は、うまくあってはならない、きれいであってはならない、ここちよくあってはならない」と述べています。ハイデルバーグ・プロジェクトはそれに当てはまります。そして、岡本太郎は、「これからはすべての人が描かなければならない」と主張しました。ガイトン氏も、ハイデルバーグ・プロジェクトを媒体にして、庶民の芸術活動への参加を訴えています。国や育ちは違っても、２人に共通しているのは、芸術に対する情熱と芸術によって開花される人間性への確信です。

前置きが長くなりましたが、ハイデルバーグ・プロジェクトは、アートという範疇を超えた社会運動なのかもしれません。では、ガイトン氏に語っていただきましょう。

Q　なぜ作品に廃品を使うのですか？

私は廃品を作品にリサイクルしていますが、それは使い捨て社会に対する批判でもあります。使い捨てられるのは物だけとはかぎりません。人間も、社会によって使い捨てられているのではないでしょうか。この風潮は変えなければいけません。そのことを問題提起しているんです。人に歴史があるように、廃品にも歴史があります。人は、自分の歩いてきた道を振り返って自己再発見したりするでしょう。私はそれを廃品を使って行っています。たとえば、何十台もの古い電気掃除機の行列。「魂の掃除」を必要としている社会への警鐘なんです。

Q　ハイデルバーグ・プロジェクトは人々の心を癒す薬だとおっしゃっていますが、その意味は？

人々の心が癒されなければ、地域や国も癒されないと私は考えます。心が病む原因となったそれまでの考え方を変えなければ、心は癒されません。新しい考え方、ものの見方が必要なのです。宇宙には、おのずと自己を癒す力(self healing power)があります。自然もそうですし、人の心もそうだと思います。ハイデルバーグ・プロジェクトにも、そんな目に見えない力があると信じています。壊れてしまった地域社会を癒すのは、政府ではなく、そこに住む私たちです。ハイデルバーグ・プロジェクトは、アートを手段として、住民のマインドセット(mindset)を変えようとしています。

ハイデルバーク・プロジェクトの作品（Photo by Hiroko Lancour）

自分自身で考えて行動する力が私たちにあるのだ、ということを皆さんに思い起こして欲しい。ハイデルバーグ・プロジェクトの意図するところは、そこにあります。ハイデルバーグ通りに来てみて下さい。従来の考え方では解釈に困るような光景かもしれません。私は、皆さんに「何だろう？」と疑問に思って欲しいのです。その疑問を自分自身と、あるいは他の人たちと語り合うことが大切だと思います。それが今までのものの見方を変えるきっかけとなるからです。そういう意味で、私はハイデルバーグ・プロジェクトが薬の役割を果たす可能性を持っていると考えています。

Q　「芸術によって地域社会を変えることが出来る」というハイデルバーグ・プロジェクトのメッセージは、社会背景や生活環境の違うよその土地、たとえば日本でも通じるのでしょうか？

私は、ハイデルバーグ・プロジェクトのフィロソフィーをHeidelbergology（ハイデルバーグ学）と名づけています。地理的に離れていても、宇宙的視点から見れば、私たちは皆、精神的に繋がっていると思うんです。言語や文化が違っても、アートを通して理解しあえます。アートに言葉は要らない、いや、アート自体が世界共通の言葉なのかもしれません。以前、ニューヨーク市の隣にあるマウントヴァーノン市から、「見捨てられてしまった古い公園を作り直して欲しい」という依頼を受けました。私は、その土地に住む老人や子供たちといっしょに、車の廃品ホイールキャップにカラフルなペンキを塗って飾ったり、廃品タイヤで花壇を作ったり、色とりどりの古い靴を公園のあずまや（gazebo）に吊るしたりして、それまで危険で住民たちが寄りつかなかった公園を、老人が寛いだり子供たちが遊べる公園に復活させました。この公園は、数年経った今でも、そのプロジェクトに携わった住民たちの協力で維持されているそうです。アート活動に参加することによって、日常生活における視点が変わってきます。これは、デトロイトでも、マウントヴァーノンでも、おそらく日本の街でも起こり得ることだと私は考えます。

Q　昨今の自動車産業の凋落は地元デトロイトにとっては大きな打撃です。しかし、見方によっては、新たなチャンスをもたらす重要な節目の時だとも言われています。ガイトン氏はどう思われますか？

ウォールストリートやデトロイトで起こっている経済破綻は起こるべくして起こったことだと思います。今こそ、創造的な思考法や新しいものの見方が必要とされています。私たちは、考える人間にならなければいけません。その昔、自動車工場での高賃金の職を求めて全国からデトロイトに労働者が集まりました。そして、工員たちは、自分の頭で考えたり、想像力を働かせたりする必要のない流れ作業に慣れっこになり過ぎました。考えなくても高賃金が得られた時代はもう終わったのです。私は、アートスクールでコントラストについて学びました。ポジティヴとネガティヴ。これは不可欠です。両極を見極めることも必要だし、両極のエネルギーを利用することも、また、その間にミドルグラウンドを見つけることも大事です。人生においてもそう。良い時もあれば、悪い時もある。悪い時を乗り切るためには、新しい方法を余儀なくされる。だから、悪い時はチャンスの時。今、世界は変わろうとしています。デトロイトもこの機会を逃すことなく、自動車産業以外に活路を見出すべきです。

Q　ドイツからの見学者が多いそうですが、ダイムラー・ファイナンシャルのCEOもハイデルバーグ・プロジェクトのファンだそうですね。

ダイムラー・ファイナンシャルのCEOクラウス・エンテンマン氏は、友人から“The Tipping Point：How Little Things Can Make a Big Difference”という本（Malcolm Gladwell著）のことを聞き、文化のウイルスみたいなハイデルバーグ・プロジェクトに興味をもつようになったそうです。ここ数年、毎年のように見学に来られています。今年の２月、ダイムラー・ファイナンシャルのイグゼキュティヴたちが世界中からデトロイトに集まったとき、エンテンマン氏からの依頼で私は講演をさせていただきました。約９０人の聴衆の前で、この困難の時期をどう乗り切るか、サクセスとは何なのか、ということについて話しました。まず、自分を信じること、成功の可能性を信じること。そして、成功を心に描くこと（visualization）によって、成功が触知できて確実（tangible）なものとなる。成功を実現させるこつはそこにあるのではないかと。

私の祖父が引っ越してきた頃のハイデルバーグ通り周辺は、ドイツからの移民が多く、手入れのいきとどいた芝生と花壇のある美しい通りだったそうです。ドイツの古い大学都市ハイデルベルクと同じ名前なので、わがハイデルバーグ・プロジェクトはドイツ人観光客の興味をひいたのだと思います。そして、訪れた人々の口コミで“デトロイトに来たら是非見てみたい場所”としてドイツ人の間で知られるようになったのではないでしょうか。

Q　デトロイトというとネガティヴなイメージが強いですが、それを変えるにはどうしたらいいでしょうか。ハイデルバーグ・プロジェクトの役割は？

デトロイトは犯罪の多い危険な所という世評があるので、多くの人々はネガティヴなイメージを描いてやって来ます。私はそのことについて、ハイデルバーグ・プロジェクトに来てくれる見学者とよく話をします。私の役目は、そういったネガティヴなイメージが実は偏見であることを彼らに気づいてもらうことです。人々にもっと深くものを見て欲しい。その向こう側にあるものまで見て欲しいし、考える人間になって欲しい。ハイデルバーグ・プロジェクトを媒介に、私にその手助けをさせて欲しいのです。貧乏でも、何も無くても、何かを創り出すことは出来るんだということを実感して欲しい。一度見に来たら、そこで感じたいろんなことが頭から離れなくなります。それが何故なのか、自問したり、周りの人たちと語り合って欲しいと思います。

５年先のハイデルバーグ・プロジェクト

現在、計画中のHouse That Makes Senseが、今年完成する予定です。Mt. Elliottに面した古い家を改造して、寄付で集めた約８０万個の１セント硬貨を外壁に貼り付けることになっています。この家は、ハイデルバーグ・プロジェクトの本部、そしてウェルカムセンターとして利用されるでしょう。観光客が泊まれるようなペンション（Bed & Breakfast）やコーヒーハウス、さらには、テーマハウスを作る計画もあります。たとえば、音楽の家、劇場の家、人工頭脳の家といった具合に。地域が活性化し、世界中からハイデルバーグ・プロジェクトの概念、Heidelbergology、を学びに来てくれる、そんなカルチュラル・ヴィレッジにしたいと考えています。

The House That Makes Senseの土台となる家

日本について

私の弟は、ミシガン大学で修士を取りましたが、今は海軍大尉として日本の佐世保にいます。弟は日本人と結婚したので、私には日本人の義理の妹がいるわけで、日本とは無縁ではありません。まだ、一度も日本に行ったことはありませんが、そのうち機会があれば是非行って見たい。ポルカドット（水玉模様）はハイデルバーグ・プロジェクトのシンボルマークみたいなものですが、私は、日本に行く時、エアポートのターミナルの中とか、飛行機の背もたれのテーブルとかにポルカドットをくっ付けようかと思っています。日本に着いてからも、点々とくっ付けていき、アメリカと日本がポルカドットで繋がっていることを示したい。それから、訪れた国の国旗を持って帰って来るのが私の習慣なんですが、日本の国旗を持って帰って自宅に飾るつもりです。そういえば、日章旗は白地に赤のポルカドットでしたよね。

もし、日本で展覧会を開く機会があれば、ハイデルバーグ・プロジェクトのことや、その概念が日本でも応用できることを、是非日本の皆さんに知って欲しいと思います。

－終わり－

筆者の経歴　　Lancour 弘子
福岡市出身。国際基督教大学語学科卒業後渡米。ウェイン州立大学コンピューターサイエンス科卒業後、Blue Cross Blue Shield of Michigan勤務。現在、ウェイン州立大学院修士課程在籍中。絵画専攻。E-mail: hirokolancour@yahoo.com